

# ピアホームだより

2011. 10. 10

## 精神病を扱った映画について

久しぶりに、神保町で精神医学関連の書籍を手に入れた。一つは、「映画にみる心の世界」(中村道彦著)と言う本で、私が、以前より統合失調症を扱った映画を求めていたこともあって、大変気に入っている。我が法人には、「カッコウの巣の上で」、「ビューティルマインド」、ドキュメント「精神」、そして、べてるのビデオが揃っている。

この本によると「シャイン」—天才ピアニストとしてロンドンの王立音楽院に留学していた主人公が発病して、10 数年を精神病院に過ごした後、あるレストランに立ち寄りピアノを弾いたことから評判となり、新しい生活を切り開いていく物語—もあることが分った。視点があるわけではないので、統合失調症を扱ったというド

尚、「映画でみる精神分析」(小此木啓吾)が

素晴らしいとされているので、チェックしておこう。

統合失調症に限らず、精神病を扱ったものとして、興味ある映画は順次当たっていき、良いものは、折に触れて紹介していきたい。

第1段、早速「レナードの朝」という素晴らしい映画に出くわした。

あらすじ—医動物学者マルコム・セイヤーがニューヨーク、ブルックリンのベインブリッジ病院に採用された。ここは慢性の神経疾患患者が多数いて絶望が支配する所だった。彼は、ある日、患者の素早い動作をみて、患者達の正常な意識を直感し、それを目覚めさせようと努力を始める。その時 L ドーパを知り、レナードという患者と協力して、試験的治療を開始する。映画は劇的な“目覚め”と、その直後副作用や効果の減弱を経験し落胆していくところも描き出す。パーキンソン氏病に対する、ドーパミンの奇蹟と長期投与の限界を名優ロバート・デ・ニーロが余すところなく演じていた。

ドーパミンをどう脳内に取り込むか？また、代謝誘導で効果の減弱を来すことなど、今も取り組まなければならない問題点がある。当初

からあったことを知り、感慨深いものがあった。医療関係者必見の素晴らしい映画だと思う。

同書によるストレスと休息効果フロイトの精神分析学を下地に、ストレス機序が提示されていた。以下引用してみる。

海はいつでも安全ではない。思いもよらぬ出来事が起こる。直ぐに処理できれば苦労はないが、出来なければいつでも葛藤と向かい合いながら悩み苦しむことになる。そこで目障りな葛藤を無意識の世界に押し込めて(抑圧)、当座は悩まされなくなる。それには、エネルギーを必要とする。抑圧に関わるメカニズムは、自我を守ることに役立つために自我防衛機制と呼ばれている。抑圧に使われるエネルギー消費は、疲労として自覚される。自我防衛機制は、目の前の不安を隠して安心を得るが、その代償として疲労が残ることになる。

果たして、統合失調症の皆さんの“疲れ”を説明できるでしょうか？

## 10月の行事

<10月1日>クラブハウス町田理事会

<10月5日>池袋サンハウスから見学

<10月17日>症例検討会(白石教授)